

## 8 (1993年4月～1995年3月)

### 人間関係原論 授業記録

#### 〈第二グループの2〉

伊藤雅子 (南山短期大学教授)

---

### 人間関係原論Ⅰの概要

#### 前期

学生は人間関係科創設以来、最も多く新入生は140名で、この期の担当者は常にそのことを念頭において授業を計画・実施しなければならなかった。

その担当スタッフチームは伊藤雅子、中堀仁四郎、大森正樹、津村俊充の4名で、中堀仁四郎氏は1993年度末に退職されたので、そのあとは竹内敏晴氏が加わった。

授業の開始に先立って担当スタッフは、まず2年間の授業の流れと大きいねらいについて話し合った。そして、2年間のテーマとして自分を含めた一人一人の個人がお互いにどのような関係の中で生き、自分の主体性を大切にしながらもお互いに影響しあい、関わりながら生きているかを把握するために「共に生きる」ことを2年間のテーマとして考えることを決めた。そのため、まず1年の学生達が自分と自分を取りまく状況をしっかり掴んでもらうために、人間関係科に入学して何をしようとしているか、何を学ぼうとしているのかを問うてみることから出発することとなった。この話し合いで同時に2年間のおおよその見通しも話しあわれ、それは図-1のようである。

| 共に生きる（2年間のねらい） |        |              |     |
|----------------|--------|--------------|-----|
| 1 年            |        | 2 年          |     |
| 前 期            | 後 期    | 前 期          | 後 期 |
| 人間での学び方をさぐる    | 変化 変える | 社会へ出ていくための準備 |     |

図-1

したがって、原論は1・2年の学生・スタッフの学習共同体づくりのスタートとなるオリエンテーション・ウィークに、2年生が自分が新入生であった1年前を思い起こしながら1年生に「メッセージ・カード」を渡したり、1年生が何人かの2年生と出会うことなどから始められた。そのオリエンテーション・ウィークの6日目に「人間関係科での学び方を探る」ことをねらいとして第1回目の授業がもたれた。原論Iとしての最初の授業ということもあって、まず教員チームが一人一人自己紹介の形で紹介され、そのあと人間関係原論とはどういう科目か、I、II全体を通してのねらいの説明がおこなわれた。

人間関係原論の授業は学生と教員スタッフが共に Learning Community を作りながら主体的・自覚的に学ぶことを通して人間観、人間関係観、教育理念、教育観を学び、あわせて人間関係教育の流れを探るものであり、この授業ではそれらとの関わりの中で私達が「共に生きる」とはどういうことを学ぼうとしていることが学生達に伝えられた。

そのあと人間関係科での学習方法は体験学習方式であるため、体験学習とは何かをまず前日に実施された1、2年合同のオリエンテーションにおける学生たちの具体的体験から学んでもらうために、その一日にやったこと（「人間関係を学ぶ、人間関係科を学ぶその一歩」、「出会いの試み」、「オン・ステージ、あの人がいるこの人がいる」）を自分の体験として何であったかを考えて書きだし、それを5～6人のグループでシェアすることをした。また「体験学習とは」どういうことかを講義で伝えるに先立ち、まず「体験学習とは何だと思っているか」を一人ずつメモし、それを隣の人と分かちあった。その内容を2～3人にインタビューして後、学ぶことによって価値観の変化などの内的な変化と何かが出来るようになったりする外的な変化のあることが指摘された。次に前日の体験は自分にとって何であったかを記述しながら体験を「体験学習」と関連づけるとき、それぞれの個人がその体験のどのような側面に関心を持つかが重要であると指摘された。私達の体験は常に物理的環境と行動的環境に左右されながら、その個人の主観的世界と客観的世界の双方にまたがりながら起こっており、多くの出来事の中から何を見いだすか、何をピックアップするかは、人によって異なる。私達の流動的な行動の背後にはたえず見えない考え、思い、気持ちなどが動いていることが行動科学の理論を使って説明された。そ

して私達のトータルな成長のために自分の体験を用いようとするならば、自分の主観的世界の枠組みに気づき、それを押し広げていくように学ばなければならないことが伝えられ、そのための授業の場の風土作り、授業への取り組み方として次の3つの点が示唆された。

- ①「私はこうみえる」を明確にする
- ②「ちょっと見方を変えてみる」に挑戦する
- ③「他の人とどれくらい自分の考えを行きかわせるか」確認する

ここではあえて体験学習の4つのステップ（体験する・指摘する・分析する・仮説化する）には触れられず、自分で考えることの大切さと、体験から学ぶ時に大切にしたいことが伝えられた。

最後に学生達には毎回の授業の後で「今日の言葉（ことのは）」としてその授業で印象に残った言葉、自分の中で起こってきた言葉、詩を書きとめることが伝えられ、また、自分のファイルを作るようにと言うことも伝えられた。人間関係科の多くに授業では、授業終了時に一人一人の学生がその授業について学んだこと感じたことをジャーナルに記入し、スタッフに提出し、スタッフはそれらを授業へのフィードバックとして読み、コメントすることが行われているが、この授業では提出された「今日の言葉」は必要に応じてフィードバックとして取り上げることとし、個々の学生の記録としての意味を大切にすることとした。

第2回授業：1回目の授業が1コマ（90分）で行われたのにたいし、2回目の授業は2時間半と少し余裕のある時間帯で行われた。この日のねらいは「私の1年間のプラン・テーマを探る」で、とりあえずの1年間の方向付けのために、すぐ完全なものは考えられなくとも今の自分の状態を耕し掘りおこして見ることと、1年間の見通しをつけてみることにした。そのために前半の1時間は実習「入学した私は今…」をした。まずB4版の白紙を3等分し、①から②と番号つけた。①には人間関係科に入学してから今日まで印象に残っていること、人間関係科をどう受けとめているかを書き、②には自分が南山短期大学に来ようと思ったとき考えていたこと、③には将来をのぞんでわたしが今予感することの3つを一人になって記入した。そして記入したことを2人組で分かちあった。

授業の後半では、授業前半で「今の私」を確認したことをもとに、「1年後の私に宛てて、手紙を書く」ことに時間を使い、書いた手紙をポストに投函した。手紙には自分が何をどのように学ぼうとしているか、モットーとしたい言葉などを、できるだけ具体的に書くように伝えられた。

授業の終わりに当たって、次の週からは早めに教室の入り口で出席をチェックし、各自自分の名札をつけ、板書された指示に従って教室に入りノート等を出して座っているようにと学生に告げられた。

第3回授業：通常の木曜日Ⅱ限目1コマ90分で行われた。この時は「これまでの自分の様々な体験を掘り起こし、人間関係科で取り扱うことがらを探る」というねらいで、人間関係科の様々な科目や体験に主体的に自分が関わっていく Motivation を高めることをめざした。まず授業の前半では個人の体験の掘り起こしの準備として最近嬉しかったこと、生きていて良かったこと、苦しかったことを思いつくままに個人でメモし、その後で2～3人でシェアリングをした。後半では A) 5才まで、B) 10才まで、C) 15才まで D)15才以後の4時期に分け記入できるよう準備された用紙に、各時期ごとに嬉しかったこと、喜びだったこと、苦しんだこと、悩んだことを記述記入した。そのあと、「今日の私の言葉（ことのは）」を記入した。

第4回授業：前回の授業を引き継ぎ、同じねらいの(2)として、前回一人一人記述した自分の今までの体験を読み直し、まず自分が重要、大切と思うものを選んでK Jラベルに個人で書き出す作業をした。K Jラベルには1枚1項目づつ、一人6枚記入した。その後、グループに別れたが、この学年は140名という大きいクラスで今回は1の位の番号の同じ人同士で、1グループ大体14名づつとなった。実際の作業はそれぞれのグループを4～5人の3つに分け全体では30グループとなった。そして各自持ち寄ったラベルの同じようなものどうしを集めて「島」を作り、B4の白紙に張り付け、島に表札をつけた。学生達は大体前向きに作業に取り組んでいたが、自分達の体験の中にあるネガティブなものも率直に表明されていたようである。しかしグループで作業すること自体が重要な学びであると言う意味が十分学生達に理解されていたとは言えない状況のグループもあった。これら2回の授業を通して学生には人間関係科の入り口に立って、過去に体験したことが今の自分を作り出し、自分の中に体験を計る経験の尺度があるという自覚の上にこれからの学びを積み上げていく準備がなされたと言うことが出来る。

第5回授業：前期の大きいテーマの後半、「これからの私の『生きること・学ぶこと』を探る」というねらいで進められた。まず、前回グループで作成した自分にとって大切な体験の分類図の複製を資料として学生に配布した。その後、学習は内発的動機と外発的動機によって行われ、その学習は私達一人一人の生き方に深く関わっていることが伝えられてから、学生達には「今までの経験をもとに、自分はどう生きたいか、自分の課題は何か」という問いが寄せられた。学生が個人でまずこの問いに対する答を書き、その後、3～4人のグループで分かちあった。この分かちあいではメンバーをA.B.C.D. とし、Aさんから一人6～7分、自分のことを話し、他の一人は記録を取り、その他のメンバーは話している人に途中で口をはさむことなくしっかり聴くというルールで行われた。この後に記入された「今日の言葉」には「今日は話したいことが話せた。

何だか自分ではないような、でも本当の内側の自分が出たように感じる]、「今日はずっと前向きな気分だったのが嬉しい」、「自分がどう生きたいかというのは簡単なようで難しい。毎日生きていく中でさまざまな疑問や悩みがあるけれど言葉や文字にできるものでもない気がした]、「自分をしっかりもてた時、自分に一人の人間としての自信がもてるような気がする」と言ったような言葉が記されていた。

第6回授業：「自分のやりたいことと人間関係科の授業と結びつける」というねらいのもとに3つのステップでおこなわれた。まず前回書きだした「自分はどう生きたいか、自分の課題はなにか」を見ながら、①自分のやりたいこと、学びたいことを確認し、書き出し、②次に①の記述をみながら自分の今受講している科目が自分のやりたいこととどう結びつくかを考え、そのためにどうかかわるかも記述し、③自分のとっていない他の人間関係科の科目についても便覧を見ながら同じように検討してみることをし、その書きだしたものを提出した。そのあと「今日の言葉」を記入して授業を終わった。

第7回授業：「『学ぶ』とは何か明確にする。新しい教育実践に目を向けること」によって『学ぶ』ことを考える」をねらいとし、まず自分にとって「学ぶ」とはどういうことか、どんなことをイメージするか等を個人でメモし、スタッフが数名の学生にインタビューして、他の人の考えを聞いたのち、自分のメモに書き加えることをしてからVTR「アメリカの新しい教育の試み」を見た。VTRでは生徒たちが自分の責任で学習のスケジュールを組み、どんどん機会を作って学んでいく Free School の例などからアメリカの教育制度の中での学ぶことの例が紹介された。その後、VTRを見ての感想、学ぶと言うことについてさらに書き加え、それを近くにいる人とシェアした。今回のVTRでは日常生活の中でも起こっていることから「学ぶ」ということを考えて欲しかったが、アメリカの教育制度の方に関心が移ってしまった人もいた。

第8回授業：2回の授業を使って学生が自主的に動きグループリサーチを行った。授業のねらいは「私達は身近なところで何を、どのように学べるかをさぐる」と「チームでのリサーチ活動の中で自分のやりたいことを実践する」の2つであった。まず無作為に35のグループをあらかじめつくり、授業当日発表し、グループの顔合わせを行った。そのうえでグループで取り組む課題と手順が説明された。グループの課題は「私の人間関係科での学びを充実させるために、どんなことが必要かをさぐる。そのため今、自分の関心のあることを出し合って一つのテーマとし、それをリサーチし、発表する。」というものであった。また手順については次のように伝えられた。①グループで自主的に計画立案し、リサーチを始める。リサーチに使用できる時間は5/27,6/3の原論の

時間、勿論それ以外の時間を使うことは自由。②結果の発表は 6/10 に行う。グループの持ち時間は 5～8 分。③ 6/3 の授業の時間には全員集まり、出欠を確認し、終了時に「今日の私の言葉」を書いた。

6 月 3 日の授業では出欠確認の後、4 教室に別れて行われる発表の場所の指定と B5 1 枚にまとめたレジメの原稿を作り、発表の 2 日前までに事務室に提出することが伝えられた。

6 月 10 日は 4 つの教室に別れ、グループの発表が行われた。1 グループの持ち時間は発表 5 分、質疑 2 分であった。各グループの発表テーマは人間関係科独自の科目（フィールド・ワーク）に関するもの、教員に関するもの、友人関係や学生生活、自分達の生き方に関するものなどであった。

第12回授業：前回のグループ活動・発表を原論 I のねらいとの関連でどのように意味づけられるかを個人で考えメモをした後、引き続き少しちがう課題でグループ活動が行われることが伝えられた。この後、3 回の授業のねらいは、入学してから今までの体験をシンボルにする、チームで創作活動をする中で、再度自分の課題に挑戦する、南山短期大学 25 周年記念事業へ参加する、の 3 つであった。そして提示されたグループの課題は「入学してから今までの体験の中から、自分にとって意味のあるものを選び出し、それを歌にする。（作詞、作曲）各グループ少なくとも 1 曲はつくること。」であった。グループ活動は同じグループで 7 月 1、8 日を使って行われ、7 月 14 日に楽譜原稿を提出することとなった。

前期最終の授業は 7 月 15 日にレポート・テストにあてられた。レポート課題は「私にとって学ぶということは 一入学、今、そして、これから」で、内容にふさわしい副題をつけることが求められた。

## 後期

後期の授業は、夏休み前にやっていたことをそのまま引き継ぐ形でスタートした。従ってねらいは夏休み前と同じで、入学してから今までの体験をシンボルにする、チームで創作活動をする中で、再度自分の課題に挑戦する、と南短 25 周年記念行事への参加であった。

第 1 回授業：夏休みのブランクを埋めるためにこれまでの経過と現状の説明、テープなどの紹介を導入部分でおこない、発表会に向けての準備練習計画の要領が伝えられ、その後、発表会での発表順番をくじできめた。学生達は学内のピアノ等の楽器のある場所を使ってグループ毎に練習をした。詞はワープロで

打ち出した形で提出することとなったが、何人かの学生ボランティアが入力を手伝った。作曲については出来ていないところ、曲は出来ていても伴奏のないものなど、いろいろであったが、スタッフも手伝って出来るだけ自動演奏装置に入力できるようにした。また、学生達の投票で優良作品を決め、南短祭で発表することとしたが、発表の場を確保することなどを南短祭実行委員に依頼した。

第2回・第3回授業：それぞれ「くじ」で決まったグループが決まった順序で、№21教室向かって左手に作られたステージで発表をした。それぞれの授業の後、「ベスト5」を投票し、投票の集計は学生ボランティアが行った。

第4回授業：先回の投票結果が発表され、南短祭での発表に向けて全員が5つに分かれて、歌の練習をした。

第5回授業：南短祭で歌の発表を済ませた後になり、前4回の授業と同じねらいで、「南短25周年記念歌集」作りをした。グループごとに集まり、印刷された全グループの歌と詩をあつめ、表紙をつけたり、カットを加えたりして各自が自分のために記念の歌集を作った。また各グループで1冊、学長、先生方、永久保存版となる贈呈用の歌集をつくった。この際、材料として色鉛筆、色紙、サインペン、はさみ、のり等が不足しないよう準備された。これまでのグループ作業ではやることの意味が良く分からなかった学生もいたが、共に作業をすることによってグループが一つになったことを体験した学生も少なくなかった。また35種類の作品を印刷するのに、予想以上の手間が必要であった。

第6回授業：6月の下旬から10回にわたって続けられてきたグループによる作業のまとめをした。この時のねらいは「入学後の体験をシンボル（詩と歌）にする作業をふりかえり、体験をシンボルにするということと、グループで共に働くということを通して得たこと、学んだことを明確（EIAH）にする」であった。授業の始めに学長に南短25周年記念歌集を贈呈したあとは、10回にわたる授業のふりかえりに使われた。まず、授業で毎回配布される日程表に10回の作業の流れを提示し、学生達はそれを見ながら記入用紙に記入した。記入用紙に書かれた問いは①体験のシンボル化について ーどんなことをシンボルにしようとしたか？どの様にすんだか？シンボルにすると言うことを通して発見したこと、学んだことは？ ②グループ作業をふりかえり ーグループ作業はどのようであったか？その中で自分は、また他のメンバーはどの様であったか？これからの生活のなかで、人と共にことをする時にどうするか？など の2つであった。記入後、グループで書いたことを分かちあった。その後、グループメンバーの一人一人へ手紙と言う形でフィードバックをした。

第7回授業：11月の中旬からの授業は「体験から学ぶ」ことがテーマとなった。まず「スタッフの声を聴くことにより、『私にとっての今の人間関係科での学びと生き方』を問い直す」をねらいとし、伊藤と津村の2名のスタッフが「私と人間関係科」というテーマで人間関係科の簡単な歴史とそれぞれがどのように人間関係科と関わりながら自分自身を変え、変えさせられてきたかを語り、その後学生との間で質疑応答があった。

第8回授業：「体験から学ぶということはどんなことかをさぐる。自分なりに体験から学ぶための指針をつくる」というねらいで、2人のスタッフの講義が中心であった。まず、大森は「森有正と経験」というテーマで哲学的立場から人間の意識、経験と体験、ことば等をめぐって話した。次に津村は発達心理学の立場からピアジェ、レヴィン、ジェンキンス等の説を紹介しながら個人はグループの中で常に基本的に安全であるという感覚を維持しようとして様々なものに挑戦し、そのプロセスが自己発見につながることを話した。そのあと個人で自分なりに体験から学ぶことのための指針をあげた後、1年間の自分の体験を指針と照らし合わせながら整理するための方向付けをした。

第9回授業：ねらいは前回のものに「各自がつくった指針により、4月から今までをふりかえる」がつけ加えられた。授業は前回時間不足から自分の指針が十分に挙げられなかった学生もいるので、まずその続きをした。その後、近くにいる人と3人組をつくり、各自書き出したものを一人3分づつの時間で分かちあった。さらに2名（大森・津村）のスタッフがそれぞれ自分の指針を学生に伝えて後、学生には体験を整理する用紙が配布された。用紙には「今回挙げた自分の学びの指針をもとに、4月からをふりかえり、どんな体験があり、変化があり、学びがあったか、又これからの自分の課題は何かを探ってくる」と課題がかかれており、学生達には、次回の授業で、その用紙に記入されたものをもとに進められるので必ず持参するようにと伝えられた。

第10回授業：前回は引き続き、ねらいとしては「4月から今までの自分の学んだこと、学ばなかったこと—指針によって明らかにしたこと—を仲間に伝える。仲間に応答する—お互いにプレゼントをする」があげられた。まずくじ引きによって3人組を作り、それぞれ記入してきた課題をわかちあい、その後、お互いに相手に今年1年の歩みを労い、新しい年に向かう思いを込めてCARDを作り、プレゼントした。時期的にクリスマスが近いこともあって自分のことだけでなく相手のことも考えながら時間を過ごした。このような作業を学生達はお互いにじっくり話しをしながら、楽しんでやることが出来た。

第11回授業：その期で南短を辞められ、司牧生活に専念される中堀先生との別



れを惜しむ会とした。中堀担当のフィールドワークグループの学生が企画し、「これからの中堀先生の出発を祝い、また、私たちの新しい歩みのきっかけとする」のねらいで、先生の隠されたエピソード、先生ご自身のお話し、メッセージを書き、共に歌い、花束を贈呈しておわった。

第12回授業：この年度の原論の最後は「これまで学んだことを再認識し、2年生の学びに備える」のねらいで、1年間のまとめが行われた。授業の始めに学生が毎回授業の後で記入し提出した「今日の言葉」、前期終了時に作成したレポート、人間関係科での学びをシンボル化するグループ作業のふりかえり等が返却された。学生達はそれらをみながら2つの課題をした。課題Ⅰは「一人になってこの一年間をふりかえり、“自分の学び”の地図をつくる」というもので、課題Ⅱは「自分の作った地図とともに、それを文章化する」であった。このうち課題Ⅱは家に持って帰って行き、1月31日に課題Ⅰと合わせて提出することが伝えられた。

| 日付        | ねらい   | やったこと  |
|-----------|---|--|
| 12. 9/30  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学してから今までの体験をシンボルにする。</li> <li>・チームで創作活動をする中で、再度自分の課題に挑戦する</li> <li>・南短25周年記念事業への参加</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①ねらいの再確認。25周年行事までの予定(課題)</li> <li>②夏休みのブランクを埋めるために。これまでの経過と現状の説明。テープなどの紹介。</li> <li>③作品の返却・発表会に向けての練習準備計画</li> <li>④発表会での発表順番きめ</li> <li>⑤練習開始 楽器のある練習場所No.1,2,21 コンコルディアの部屋</li> </ul> |
| 13. 10/7  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学してから今までの体験をシンボルにする。</li> <li>・チームで創作活動をする中で、再度自分の課題に挑戦する</li> <li>・南短25周年記念事業への参加</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①グループによる作品の発表1</li> <li>②ベスト5を選ぶ投票</li> </ul>   |
| 14. 10/21 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学してから今までの体験をシンボルにする。</li> <li>・チームで創作活動をする中で、再度自分の課題に挑戦する</li> <li>・南短25周年記念事業への参加</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①ベスト5 投票結果発表</li> <li>②南短祭発表のための準備、グループ分け練習</li> <li>③今後の日程について</li> </ul>  |
| 15. 10/28 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学してから今までの体験をシンボルにする。</li> <li>・チームで創作活動をする中で、再度自分の課題に挑戦する</li> <li>・南短25周年記念事業への参加</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①南短25周年記念歌集づくり</li> <li>②グループ毎に集まる。</li> <li>③印刷された全グループの歌と詩を集め表紙をつけたり、カットを加えたりして各自が自分のために記念の歌集をつくる</li> <li>④グループで1冊贈呈用の歌集をつくる</li> </ul>  |
| 16. 11/4  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学後の体験をシンボル(詩と歌)にする作業をふりかえり、体験をシンボルにするということ、グループで共に働くということを通して得たこと、学んだことを明確(EIAH)にする</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>①学長へ南短25周年記念歌集を贈呈</li> <li>②ふりかえり<br/>個人作業、分かち合い、お互いへの手紙</li> </ul>   |
| 17. 11/18 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・スタッフの声を聴くことにより、「私にとっての今の人間関係科での学びと生き方」を問い直す</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①「私と人間関係科」伊藤先生編 質疑応答</li> <li>②「私と人間関係科」津村先生編 質疑応答</li> </ul>   |
| 18. 12/2  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験から学ぶということとはどんなことかを探る。</li> <li>・自分なりに体験から学ぶための指針をつくる。</li> </ul>                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>①話しⅠ 『森有正と経験』大森正樹</li> <li>②話しⅡ 『体験から学ぶために』津村俊充</li> <li>③自分なりに体験から学ぶことの指針をあげる(各自)</li> </ul>   |

| 日付        | ねらい   | やったこと   |
|-----------|---|---|
| 19. 12/9  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験から学ぶということとはどんなことかを探る。</li> <li>・自分なりに体験から学ぶための指針をつくる。</li> <li>・各自がつくった指針により、4月からの今までをふりかえる。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>①自分なりに体験から学ぶということを考えてみる。体験から学ぶことの指針をあげる。(各自)(前回からの続き)</li> <li>②近くの人と3人組をつくり、自分のかいたものを分かち合う。(3分ずつ)</li> <li>③体験から学ぶー私の指針ー 大森正樹・津村俊充</li> <li>④課題(用紙に記入・次回提出)<br/>今回挙げた自分の学びの指針をもとに4月からのふりかえり、どんな体験があり、変化があり、学びがあったか、又これからの自分の課題は何かを探ってくる。</li> </ul> |
| 20. 12/16 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月から今までの自分の学んだこと学ばなかったことー指針によって明らかにしたことーを仲間につたえる。</li> <li>・仲間に応答する。ーお互いにプレゼントをするー</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>①3人組をつくる。(番号札によって)</li> <li>②課題(12/9付)を分かち合う</li> <li>③プレゼント作りとプレゼント。3人組の中でお互いに相手に、今年一年の歩みを労い、新しい年に向かう想いを込めてCARDをつくり、プレゼントする。</li> </ul>   |
| 21. 1/12  | 中堀先生とのお別れを惜しむ<br>これからの中堀先生の出発を祝い、また、私たちの新しい歩みのきっかけとする。  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①オープニング</li> <li>②先生の暴露話</li> <li>③中堀先生のお話</li> <li>④メッセージを書く</li> <li>⑤歌→花束→クラッカー(企画は佐織・一宮養護学校のメンバー)</li> </ul>   |
| 22. 1/20  | ・これまで学んだことを再認識し、2年生の、学びに備える。  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①課題Ⅰ<br/>一人になってこの一年間をふりかえり“自分の学び”の地図をつくる</li> <li>②課題Ⅱ<br/>自分のつくった地図をもとに、それを文章化する。<br/>課題Ⅱは家で。1/31課題ⅠⅡ提出。</li> </ul>   |

## 人間関係原論Ⅱの概要

### 前期

1993年度始めに原論チームが作られ、2年間の見通しが話し合われた中で、2年前期は「変化、変える」がテーマになることがすでに決められていたが、前期はそのこともふまえながら「関わりの中に生まれ、関わりの中に生きる私」を問うてみることとなった。また、授業時間が原論Ⅰでは2コマ目(10時40分～12時10分、90分間)のみであったため、授業プログラムを作成するときの制約となったが、原論Ⅱでは2コマが確保され、単位充足のための必要時間

数を流動的に活用することが可能となった。2年次の学生は就職活動が授業時間帯に入ってくる可能性が有るため、6月中に授業をまとめ、7月はフリーにすることとした。

授業開始の前日持たれたスタッフミーティングでは、原論Ⅰの最終レポートと原論Ⅰのふりかえりが行われて後、テーマについて確認がなされた。人が人間として生き、人間になっていく力として関わっていく力を意識することが大切であり、そのためには「個」として生きる「私」をどれくらい意識しているかを問い直すこととなった。そして、前期の6回(12コマ)の授業では「私は何者かを問い直してみる」ことに続いて「関わりの中に生きる私」を確認することをねらいとすることとなった。

この「私であること」、自立した人間である自分を確認することはわがままとか自分勝手ということとは異なるが、協調のなかに埋まってしまう自己を確立することである。その「私」は自己として確立されていくものであると同時に「関わりの中に生きる私」でもある。そのために、他の人と「同じ」で安心できる私と、他の人と「違う」ことで安心できる私、言い換えるならば、自分の中に他の人と同じものと違うものを探ることを通して関わりの中に生きる私を問うてみようということになった。

第1回授業：原論Ⅱの導入となる授業は、4月15日、午前10時に開始し、①スタッフ(竹内、伊藤、大森、津村)紹介、②入学直後に自分に宛てて書いた手紙と原論Ⅰの最終レポートを返却し、各自読み直し、③これからの1年間をどのように過ごしたいかを個人で考え「今年の私のキャッチフレーズ」を作り、④これからのスケジュールとして授業は、約1カ月後の5月13日9時に再開され、6月末まで継続されることが説明された。

第2回授業：「私は何者かを問い直してみる。『私が生まれるとは』ということかを考えてみる」がねらいとなった。授業前半では「あなたは誰？」という質問を自分に対して発し、「自分にとって大切なもの」を1、2取り上げ、どうしてそのように考えるかをメモしたのち、2～3人の人とシェアリングした。そのあと引き続き「私を見失ったとき」の状況を個人でメモし、同じようにシェアリングをした。休憩をはさんで後半の授業では「私が生まれるとは」どういうことかを戯曲に聞くということで、竹内先生が戯曲「夕鶴」の「つう」について話し、その後、谷川俊太郎作の戯曲「部屋」を2人の学生が読み、竹内先生のコメントがあった。

第3回授業：「関わりの中に生きる私②、『私を問う』ことの意味を見つけ出す」をねらいとした。まず、「なぜ授業で『私を問う』ということをするのか？」という問いかけを学生にして、必要か？不必要か？考えられることをすべてを

個人で記述した。その後、6人グループを作り、そのグループで個人記述したことを模造紙を使い討議し、B4の白紙に討議内容をまとめると同時に、模造紙を教室内に掲示した。休憩後、掲示されたものを見ながら、印象に残った意見・考え方をメモし、再度一人になって『私を問う』ことの意味を考え、メモをした。授業の終了前にアントニー・デ・メロの詩「おまえはだれだ？」が朗読され、音楽を聞くひとときがもたれた。詩は次のようである。

昏睡状態にあった婦人が亡くなった。彼女はすぐさま天へ連れてゆかれ、裁きの座の前に立たされるのを感じた。

「おまえはだれだ」と天の声がいった。

「市長の妻です。」彼女はこたえた。

「だれの妻かときているのではない、『おまえはだれだ』ときいておる。」

「私は4人の子の母です。」

「だれの母かときいているのではない、おまえはだれだ。」

「私は教師です。」

「おまえの職業をきいているのではない、おまえはだれだ。」

そんなやりとりが続いた。何を答えてもおまえはだれだという問いに満足な答を返していないようだった。

「私はクリスチャンです。」

「おまえの宗旨をきいているのではない、おまえはだれだ。」

「私は毎日教会におまいりし、いつも貧しい人、弱い人を手助けしています。」

「なにをしたかきいているのではない、おまえはだれだ。」

彼女は見事にこの試験に落ちたので、地上へ送り返された。病が癒えたとき、彼女は自分はだれなのかを究めようと決心した。

以後、彼女の生活は一変した。

この問いは誰にとっても簡単に答えられるものではない。むしろ、考えていくプロセスに意味があるのであろう。学生たちも「なんだかよくわからなかった」とか、考えることは「必要でもあり、不必要でもある」といった反応を示している反面、「はじめわからなくて困ったけど、いろいろの人と話している間にだんだんわかるようになってきた。絶対必要だとは言えないかも知れないが、よく考えることで何か見えるなら、どんどん考えていきたい」と言う人や、「私を問うことは生活に密着した自然なことで、とにかく自分にしかできないこと」であるとか、「一人だけ意見が違って、それを大切にしたいし、違っても堂々と言えるようになりたい」といっている。また、『私を問う』こ

とは、他人に自分をわかってもらいたいときが殆どだと思っていたけど、実はそればかりでなく自分のことを知るためとか、自分を大切にするためだということがわかった」と「今日の私の言葉」に記して、スタッフ側の意図がある程度学生たちに伝わっていたことを示している。

第4回授業：「現在、自分はどのようななかかわりの中にあるかに気づく」というねらいで、自分と自分の周囲との関わりに目を向けてもらうこととし、「現在、私はどのようななかかわりの中にあるか？」考え、個人でできる限りの、関わりをリストアップする作業から入った。授業の大部分は母と娘たち関わりを描いた映画《秋のソナタ》をみて、その後、映画を見て、私はどのような関わりの中にあるかをメモするために①授業の始めに書いた自分の関わりに書き加えたとしたら、どのようなことがありますか、②または、もう少しその関わりに関して、感じたり考えたりすることは？とのヒントがあたえられ、記述をした。そして、一人のひととき（言葉と音楽）の後、「今日の私の言葉」を記入した。

母と娘の関係は様々な側面を含んでおり、また微妙な人間関係の綾がみられる。母娘関係とは何かといった一般論的説明もなく、いきなり《秋のソナタ》での、かなり特異な母娘関係や、ピアニストという芸術にたずさわる女性の生き方をみて、学生達が考え、感じることは、様々であろう。しかし、スタッフ側には、一般論でない一つのストーリーを通して、自分の生き方や関わり方を考えて欲しいという意図があった。

第5回授業：ねらいは「映画《秋のソナタ》の主人公、母と娘の関係を通して自分の生き方をさぐる」というみので、授業ではまずグループで映画の筋や登場人物について確認した後、前回、映画を見た直後に書いたメモのわかちあいをした。そのあと、「母と娘の関係に焦点をあて、共感できるところとそうでないところを書き出し、ペアでわかちあいをした。この2回の話し合いの後、一人一人の学生は「自分は関わりの中で何を大切にしているか」考えメモをした。関わりの中で自分が何を大切にしているかの問いかけは次の授業へも引き継がれた。

第6回授業：「関わりの中で私が大切にしているものは何か、また、それをどのようにしているかを吟味してみる」というねらいのもとに、ペアや一つのグループ内だけでなく、さらに多くの人々と分かち合うなかで確認・吟味することをした。そのため、分かち合いの後、「あなたが大切にしたいという、その生き方は？」という問いかけへの記入用紙に記入をした。問いかけの中には、相手を大切にしようとしているか、自分を大切にしようとしているか、自分のことを主張しようとする生き方か、相手に合わせようとする生き方か、今

の関係をこわしたくないという生き方か、新しい関係を創り出したいという生き方か、相手とぶつかることを避けようとする生き方か、もっとぶつかることを勇気づける生き方か、というものに（YES：NO）でこたえて後、心を動かされたものや興味をひかれた問いに対し言葉で書き出してみるものが含まれていた。この記入の後、竹内先生より戯曲「人形の家」から「ノラの場合」として短いお話しがあり、詩（アントニー・デ・メロ『心の泉』より、摂理）の朗読と音楽をききながら「一人のひととき」をすごした。

第7回授業：「前期の授業をふりかえり、『関わりの中に生きる私』を考え、記述してみる」というねらいでおこなわれた。授業の前半では高校生向けの説明会のとき人間関係科に関心のある高校生へのメッセージをひとりひとりが書いた。後半では夏休みまで授業の予定が説明された。それは①人間関係科の学習に関連のある図書を1冊は夏休み前までに、もう1冊を後半授業開始までに読むこと、②原論Ⅱのスタッフの1人と個人面接をすること、③「関わりの中に生きる私」と題するレポートにひとりひとりがふさわしい副題をつけて作成することが含まれていた。

## 後期

第1回授業：10時40分から始められた後期の授業は、夏休み中の課題図書レポートについて各学生が書誌事項を書き出してもらうことからスタートした。この授業のねらいは「卒業まで残り半年になったところで、人間関係科とともに学んでいる、また学んできた第21期生の一人ひとりと関わりを深める」というもので、人間関係科での学びの証として、出来れば同期の全学生にインタビューして、記録を作ってもらうことにした。まず、学生にはいわゆる「サイン帳」のようなものをイメージしてもらい、同期学生の名簿を見ながら他の一人一人学生について次のことをメモした。それは①一人一人を思い出してみ、人関生活でどのような関わりだったか？②自分は人関でどんなふうに過ごしてきたか？③これから残りの時間、一人一人に出会うとすると、どんなことをきいてみたいか？全体に共通の項目とそれぞれに違う特別の項目を考えた。同期の学生にインタビューする準備をした。

第2回授業：前半にそれぞれが使う用紙のデザインをし、後半では実際にインタビューを始めることが予告された。

後期の授業の前半はさまざまな形で学生同志の出会いが促進される場面を作りながら、一部の学生が南短祭の実行委員であったりして多忙であったり、合宿授業が入ったりするため割合にゆったりとフリーな時間をとった。9時に開

始された2回目の授業ではこのような前半の見通しが伝えられた後、各自がまず何枚かのカードを準備し、10時40分からは実際にインタビューを始めました。最初は機械的に二人を選んでインタビューし、その後は、出来るだけ合ったことのない人にインタビューすることをすすめ、自由に動くことをすすめた。

**第3回授業：**まず「これからの一年間をどのように過ごしたいか？」〈今年1年間の私のキャッチフレーズ〉のVTRをめ、後半は一人15分くらいをめどに学生同志インタビューをし、授業終わり前の10分間に何人かの学生からその成果を聞いた。

**第4回授業：**フリータイムとして、学生達は自由なインタビューの時間として使った。

**第5回授業：**ねらいを確認した後、「何人ぐらいにインタビューしたか？」を学生達にきき、学生の現在の様子確かめた。そして、より幅の広い学生同志の出会いを作り出すためにフォースドチョイス形式で4回グループに別れ、その中でペアになりインタビューをした。フォースドチョイスに使われたのは①世界の好きな・関心のある10地域、②FWグループ、③9つの文房具、そして④指導生グループであった。残りの時間はフリータイムとし、授業終了前に「11月18日は新聞を読みます。最近の朝刊を2部もってきてください。」というアンアウンスがあった。

**第6回授業：**学生達には自分達のイニシエティブでフリーに動いて、インタビューをした。

**第7回授業：**合宿後の後期後半は【私は一人で動けるか】に入り、ねらいは①私たちの身の回りにどんなことが起こっているかを知る、②ものごとを多面的にとらえる、③主体として自分が社会に起こっていることがらとどのようにかかわるかの3つであった。後半の流れとして2回の準備授業の後、プレ・ディベートを試み、その経験からさらに資料等を収集、リサーチし、冬休みをはさんで2回の全体ディベートを実施し、最後にまとめをするということが説明されて後、学生は一人になって新聞を読み、自分なりに記事をチェックしながら、自分の関心領域を拾いだした。その後、無作為に作られた18のグループ（1グループ6～7人）に分かれ、それぞれがどんなことに、どのような関心を持っているかわかちあい、B5白紙に書きだした。学生が持参した新聞は以後再度見る可能性もあるので、グループごとにまとめて保存することとした。また、ここで作られたグループはディベートが終わるまで継続されることも学生達に



伝えられた。この回の授業で新聞をみて関心のあることを拾い出す作業は、学生達にとってはこれまでにやったことのないもので、その意味で興味をそそられたようであるが、この段階ではスタッフ側の意図が十分に大多数の学生に伝わったとは言い難く、真剣に取り組めなかった学生も少なくなかった。

学生達の拾い上げた新聞記事は非常に多岐にわたったので、8回目の授業に向けてそれらを領域毎に整理して、テーマをきめ、各テーマごとに賛成と反対の立場でディベートできるように、設定することにした。スタッフミーティングで取り上げられた領域は、人間の尊厳に関すること、教育、経済、企業社会、女性問題、医療問題、難民問題、家庭の8領域であった。そして、最終的に次の7つのテーマが設定され、18のグループは自分たちのテーマを選び、賛成側とするか、反対側とするかを決めた。設定されたテーマは次のようである。

- ・安楽死は認めるべきである 4グループ
- ・「いじめ」はなくすことができる 2グループ
- ・子どもはビシビシ叱って育てるべきだ 4グループ
- ・女性は企業を変えることができる 2グループ
- ・女性の価値は身につけているもので決まる 2グループ
- ・日本は貿易自由化にふみきるべきだ 2グループ
- ・人は結婚するものだ 2グループ

第8回授業：「チームで動く中で、主体的な私を意識してみる」というねらいが前回の3つにつけ加えられた。この授業では、まずテーマの提示とグループによるテーマの決定がなされたのち、各グループはどのようにリサーチを進めるか計画して後、新聞を見直したり、図書館で資料を調べたりすることを始めた。またグループか個人でリサーチの記録もつけることになった。

第9回授業：前半は資料を持ち寄ってディベートの準備をしたり、作戦を立てたり、さらに必要なリサーチをした。そして、後半では、「ディベート」とはどのように進めるのか理解するために「プリディベート」が行われ、時間の使い方などを説明した。それは次の通りである

|           | 練習    | 実際 |
|-----------|-------|----|
| 肯定論 「立論」  | 1分30秒 | 3分 |
| 否定論 「立論」  | 1分30秒 | 3分 |
| 作戦タイム     | 1分    | 1分 |
| 否定側「反対尋問」 | 2分    | 3分 |
| 肯定側「反対尋問」 | 2分    | 3分 |
| 評価：聴衆者の拍手 |       |    |

また、実際のときは反対尋問はそれぞれ2回づつと「最終弁論」が加わり、1回のディベートは全体が25分で構成されることが説明された。

第10回授業：先回のプレディベートを聞いたという状況の中で、再度、何故ディベートをするのか、自分たちの論点に広がりを持たせるためにどのような方法があるのかなどについてスタッフ側から、説明・示唆があり、その後、本ディベートに向けて、順番のくじ引き、タイムスケジュールの発表をした。

第11回・12回授業：本ディベートは11、12回目の授業を使って行われた。本番ディベートについては、テーマによってばらつきはあったもののかなり厳しい時間的制約の中で全体に積極的に取り組んでいた。スタッフ側で最終的にテーマをしぼり設定する時に、様々な角度から、様々なレベルで取り組めるよう配慮したが、一見して安易に取り組めそうなテーマについては、学生たちの取り組み方も安易に流れたきらいがあった。そのテーマも取り上げ方によっては「人とは」といった意味ある切り込み方も可能ではあったと思われるし、実際に準備の話し合いの段階で深く話し合っても、そのことを適切にディベートの本番に出せなかったことも実際にはあったと思われる。この原論で、「ディベート」を方法として取り入れ、学生たちには自分を取りまく様々な状況を意識的かつ批判的に考察し、その状況についてグループで話し合い、自分の考えを述べてみることを体験してもらった。ディベート本番での結果も大切であるが、スタッフの意図としては問題意識を持ち、調べ、話し合い、意見を述べ、更に対決したチームの反論にも耳を傾ける中で起こってくる自己内、対人間、グループ間のプロセスの意味を考えることであった。この意図はすべての学生に伝わっていることを切に願いながらも、その限界を謙虚にうけとめ、また、「いつか時が来れば必ず」という学生＝人間への信頼にゆだねることも必要であった。

原論Ⅱ最後の授業はこの一連の「ディベート」をふりかえること、最終課題の提示、この年度を最後に退職される竹内先生を歓送するというプログラムでおこなわれることとなった。まず、学生達は①ディベート活動を通して、あなたの考え方やものごととのとらえ方などで気づいたことや学んだことは？②グループ活動の中であなたの動きについて気づいたことや学んだことは？③これからの生活の中で、あなたが一人でものごとを判断し行動するための大切なことは何ですか？の3つの問いに対し個人で考え、記入をした。その後、各ディベートグループを2つに分け、ディベートの相手となったグループの半分と一緒に？  
なってグループを作り、そのグループで記入したものをもとにわかちあいをした。そして一人一人がそのわかちあいグループの他のメンバーにメッセージを書き、それを交換した。休憩の後、次のような最終課題が提示された。

次のステップをふんで2年間を終えるにふさわしいまとめのレポートを作成する。

1. 自分のファイルを整理し、学んだことを列挙する。この時、他の授業で関連があると思われることがあれば含めるとよいでしょう。
2. 列挙されたことを見て、私にとってこの2年間ほどの様な意味があったか考察する。
3. 1. と 2. をふまえて、これからの私の課題を考える。
4. 2年間でシンボライズする詩、または言葉を最後につける。
5. 表紙をつくり、ふさわしいタイトルをつける。

その後は、前回の授業で募集した企画委員の学生の進行で竹内先生の歓送会が行われた。まず、竹内先生以外のスタッフがそれぞれ先生との関わりを数分づつ話し、竹内先生のお話があり、最後に全員で先生の自己表現の授業でよく歌われた歌を歌って、会と授業とを終わった。

この原論の後半では、「ディベート」を一つのアプローチとして用い、それなりの意味はあったように思われた。しかし、ディベートを単なるイベントとして取り扱っていた学生が多かったように見受けられ、一人一人の学生がもう少し個人で考えるようにプログラムを工夫することがされても良かったという反省もある。また、140名という学生にスタッフ側の意図を十分に伝え、様々なグループ活動や実習をきめ細かく指導しながら進めることの難しさもあったように思われる。「個」とコミュニティを意識したプログラム作りを試みたかったという声や、全体の中に自分が出せる機会が欲しかったという意見がスタッフのふりかえりの中で表明された。各回の授業を一つ一つ組み立てていくのではなく、2年間の原論全体を割合に大きく区切って、その流れの中で大きいプログラムを組んでいくという「イベント型」の原論であったということができると思う。

## 1994年度人間関係原論Ⅱ

| 日付      | ねらい   | やったこと  |
|---------|---|--|
| 1. 4/15 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 昨年の今ごろの私に立ちもどり、これからの1年間をどう生きるかを考える。</li> <li>• 再出発をする。スタートをきる。</li> </ul>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>①スタッフ紹介</li> <li>②レポート&amp;手紙の返却 見る読む</li> <li>③これからの1年間をどのように過ごしたいか — 今年のキャッチフレーズ — 2・3人でシェア。</li> </ul>   |
| 2. 5/13 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 私は何者かを問い直してみる。</li> <li>• 「私が生まれるとは」どういうことかを考えてみる。</li> </ul>                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①「あなたは誰？」個人メモ、シェアリング<br/>自分に大切なものを1,2取り上げてどうしてそう考えるかを記入 シェアリング</li> <li>②「私を見失ったとき」個人メモ(状況) シェアリング</li> <li>③戯曲に聴く「私が生まれる」とはどういうことか</li> </ul>  |
| 3. 5/20 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 関わりの中に生きる私</li> <li>• 『私を問う』ことの意味を見つけ出す</li> </ul>                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>①問いかけ：なぜ授業で『私を問う』というのをやるのか？</li> <li>②個人記入：必要か？不必要か？考えられることをすべて記述してみる。</li> <li>③グループ討議、模造紙を使い話し合い、B4にまとめる（6人グループ）</li> <li>④掲示：見ながら、印象に残った意見・考え方をメモする。</li> <li>⑤一人になる。『私を問う』ことの意味を考える。再度考えてメモする。</li> </ul> |
| 4. 5/27 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 関わりの中に生きる私</li> <li>• 現在、自分はどのようなかわりの中にあるかに気づく</li> </ul>                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>①「現在、私はどのようなかわりの中にあるか？」と考え、個人でメモをする。できる限り、関わりをリストアップする。</li> <li>②映画&lt;秋のソナタ&gt; 映画を見て、私はどのようなかわりの中にあるかをメモする。</li> </ul>   |
| 5. 6/3  | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 関わりの中に生きる私</li> <li>• 映画「秋のソナタ」の主人公、母と娘の関係を通して自分の生き方をさぐる</li> </ul>            | <ul style="list-style-type: none"> <li>①先週の映画 登場人物とストーリーについて話し合う。先週書いたメモを分かちあう。</li> <li>②母と娘の関係に焦点を当てる。共感できる場所そうでないところを書き出すペアで分かち合い。インタビュー。自分は関わりの中で何を大切にしているか</li> </ul>   |
| 6. 6/10 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 関わりの中に生きる私</li> <li>• 関わりの中で私が大切にしているものは何か、また、それをどのようにしているかを吟味してみる。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>①前回の「関わりの中で何を大切にしているか？」明確化。メモ確認。ペアで分かち合い。大きな輪になって。私が大切にしていることへの問いかけに答えてみる。インタビューにより、発表</li> <li>②人形の家から—ノラの場合—</li> </ul>   |
| 7. 6/24 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 関わりの中に生きる私</li> <li>• 前期の授業をふりかえり、「関わりの中に生きる私」を考え、記述してみる。</li> </ul>           | <ul style="list-style-type: none"> <li>①高校生へのメッセージ</li> <li>②レポート作成。前期の授業に参加して「関わりの中で生きる私」<br/>7/8 研プロ発表に参加</li> </ul>   |

| 日付        | ねらい  | やったこと   |
|-----------|--|---|
| 8. 9/30   | <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業まで残り半年になったところで人間関係科でもとに学んでいる、また学んできた第21期生の一人ひとりとの関わりを深める。</li> </ul>  | <p>人関での私の学びの証(サイン帳のようなもの)名簿を受け取り、人間関係科でもとに学んでいる一人ひとりの名前を見て、次のことを考えてみる。メモしてみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりを思い出してみ、人関生活でどのような関わりだったか?</li> <li>自分は、人関でどんなふうに通じてきているか?</li> <li>これからの残りの時間、一人ひとりに出会うとすると、どんなことを聞いてみたか? 共通の項目。特別の項目</li> </ul> |
| 9. 10/7   | <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業まで残り半年になったところで人間関係科でもとに学んでいる、また学んできた第21期生の一人ひとりとの関わりを深める。</li> </ul>  | <p>①今日までに考えてきた内容をもとに、カード作りを行う。</p> <p>②インタビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2人くらいは、偶然に出会ってみる。</li> <li>後は、自由に出会ってみる。できるだけ会ったことのない人と出会うよう。</li> </ul>   |
| 10. 10/14 | <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業まで残り半年になったところで人間関係科でもとに学んでいる、また学んできた第21期生の一人ひとりとの関わりを深める。</li> </ul>  | <p>①VTRを見る。「これからの1年間をどのように過ごしたいか?」〈今年1年間の私のキャッチフレーズ〉</p> <p>②お互いに出会い、インタビュー〈人関での私の学びの証〉自由に出会ってみる。</p>   |
| 11. 10/21 | フリータイム   |   |
| 12. 10/28 | <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業まで残り半年になったところで人間関係科でもとに学んでいる、また学んできた第21期生の一人ひとりとの関わりを深める。</li> </ul>  | <p>①何人くらいの人とインタビューしたか? 現在の学生の様子を伝える。</p> <p>②お互いに出会い、インタビュー</p> <p>《フォースド・チョイス》</p> <p>インタビュー 10分、記入 5分</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>世界の好きな国・関心のある地域</li> <li>FWグループ</li> <li>文房具</li> <li>指導生グループ</li> </ol>                                     |
| 13. 11/4  | フリータイム   |   |
| 14. 11/18 | <p>私は一人で動けるか (1)</p> <p>【新聞を読み、関心を広げる】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの身の回りのにどんなことが起こっているかを知る</li> <li>ものごとを多面的にとらえる</li> <li>主体としての自分が社会に起こっていることがらとどのようにかわるか</li> </ul> | <p>①ねらいの提示、後半の授業の流れ</p> <p>②一人のなって新聞を読む。自分の関心領域を拾い出す</p> <p>③グループ討議 グループメンバーがどのようなことに関心をもっているかをわかち合う (B5の白紙に関心ある問題を書き出す)</p>  |

| 日付        | ねらい   | やったこと   |
|-----------|---|---|
| 15. 11/25 | <p>私は一人で動けるか (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの身の回りのにどんなことが起こっているかを知る</li> <li>ものごとを多面的にとらえる</li> <li>主体としての自分が社会に起こっていることがらとどのようにかわるか</li> <li>チームで動く中で、主体的な私を意識してみる</li> </ul> | <p>【テーマの提示とリサーチ】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①ねらいの再提示、テーマの提示、テーマの決定</li> <li>②リサーチ活動を開始、グループ毎にどのようにリサーチを進めるかを計画する、リサーチ活動を計画する、新聞を見直す、図書館に出かけ文献を調べる</li> <li>③グループ及び個人でリサーチの記録をつける</li> </ol>   |
| 16. 12/2  | <p>私は一人で動けるか (3)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの身の回りのにどんなことが起こっているかを知る</li> <li>ものごとを多面的にとらえる</li> <li>主体としての自分が社会に起こっていることがらとどのようにかわるか</li> <li>チームで動く中で、主体的な私を意識してみる</li> </ul> | <p>【資料を持ち寄り、リサーチ】</p> <p>【Ⅱ限目：プレ・ディベート】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①スケジュールの確認</li> <li>②今日の後半のプレディベートに向けて作戦を立て、リサーチを進める</li> <li>③プレ・ディベート、方法の説明</li> </ol>   |
| 17. 12/9  | <p>私は一人で動けるか (4)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの身の回りのにどんなことが起こっているかを知る</li> <li>ものごとを多面的にとらえる</li> <li>主体としての自分が社会に起こっていることがらとどのようにかわるか</li> <li>チームで動く中で、主体的な私を意識してみる</li> </ul> | <ol style="list-style-type: none"> <li>①導入プレ・ディベートを聞いて <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 何故、ディベートをするのか？</li> <li>(2) 論点に広がりをもたせるために</li> <li>(3) 本にディベートに向けて</li> </ol> </li> <li>②リサーチ活動の続行、来週に向けて、計画を練り、リサーチを進める</li> </ol>                          |
| 18. 12/16 | <p>私は一人で動けるか (5)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>私たちの身の回りのにどんなことが起こっているかを知る</li> <li>ものごとを多面的にとらえる</li> <li>主体としての自分が社会に起こっていることがらとどのようにかわるか</li> <li>チームで動く中で、主体的な私を意識してみる</li> </ul> | <p>プレディベート開始 1～5ラウンド<br/>(10グループ参加)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①安楽死は認めるべき</li> <li>②「いじめ」はなくすることができる</li> <li>③子供はビシビシ叱って育てるべき</li> <li>④女性は企業を変えることができる</li> <li>⑤女性の価値は身につけているもので決まる</li> <li>⑥日本は貿易自由化にふみきるべき</li> <li>⑦人は結婚するものだ</li> </ol> |

| 日付         | ねらい   | やったこと   |
|------------|---|---|
| 19. 1 / 13 | <p>私は一人で動けるか (6)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 私たちの身の回りのにどんなことが起きているかを知る</li> <li>• ものごとを多面的にとらえる</li> <li>• 主体としての自分が社会に起きていることがらとどのようにかわるか</li> <li>• チームで動く中で、主体的な私を意識してみる</li> </ul> |   |
| 20. 1 / 20 | <p>私は一人で動けるか (7)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 私たちの身の回りのにどんなことが起きているかを知る</li> <li>• ものごとを多面的にとらえる</li> <li>• 主体としての自分が社会に起きていることがらとどのようにかわるか</li> <li>• チームで動く中で、主体的な私を意識してみる</li> </ul> | <p>①個人記入(1)ダイベート活動を通して、あなたの考え方やものごとのとらえ方などで気づいたこと学んだことは？(2)グループ活動の中であなたの動きについて気づいたことや学んだことは？(3)これからの生活の中で、あなたが一人でものごとを判断し行動するために大切なことは何ですか</p> <p>②分かち合い</p> <p>③メッセージ交換</p> <p>④最終レポート課題提示</p> <p>⑤竹内先生をお送りする会</p> |